「ヒガンバナ」とは「曼珠沙華」

増山雄三

先日、テレビを見ていたら、奈良県御所市にある「棚田の中の伏見のため池」として、奈良県登録資産に登録されている「伏見池」の周りに、頭を垂れる稲穂を背景にして、深紅のヒガンバナが、ぐるりと取巻いて咲いているのが映っていた。

そこで、ＪＲ和歌山線に乗り、明治期に創建され、その面影を残す駅舎の御所駅で降り立ち、レトロな雰囲気の商店街にあった観光案内所で、「『ヒガンバナ池』とか『丸池』と呼ばれる場所があると聞いてきたんです」と尋ねると、「あァ　『伏見池』のことですね」といって、すぐ教えてくれた。

この池は、今も地域の貴重な水源になっているが、同市観光協会が設けている「葛城の道コース」沿いにあり、そこから、金剛・葛

城の山並みを背に眼下に大和平野が広がり、更に、千八百体も石仏がある「**九品寺**」や、「**いちごんさん**」と親しまれている、「**葛城一言主神社**」などの名所もある。

この神社は、一言で願いを叶えてくれるという一言主神と、雄略天皇の二柱を祭神として信仰されているが、古事紀によれば、第二十一代雄略天皇が葛城山中で狩猟をしていた際、天皇と同じ姿の一言主神が現れたので、互いに狩猟を競ったあと、天皇が、持参していた大御刀と弓矢、それに着ていた衣服を神に献じて拝礼した、と記されている。

さて、例年、九月から十一月まで走る、ごせ葛城の道臨時バスは、コロナの感染拡大防止で運行が停止されていたので、歩いていく道すがら、至る所にヒガンバナが群生していて、空の青さの中に、真っ赤な花と真直ぐに立つ緑の茎が、鮮やかに映えている。

ところで、俳句などで用いられている季語の「**曼珠沙華**」は、サンスクリット語の「マ

ンジュ―シャカ」の音を写した語であるといわれているので、いわば、この花は有難い仏教植物なのである。

そんな事もあるのか、この花は、なぜかもの悲しさが重なる花で、私が逃惑った空襲の焼け跡で、クッキリ咲いていたのを思い出すが、伏見地区に戻ってくると、路傍には「**葛城三十八景**」の漢詩が紹介されていて、それは、「中秋の名月を思い浮かべ、月が西の山へ落ちていくのをずっと看ている」と結ばれた詩の説明板を、何度も読み返した。

そのあと、近くの地蔵さんに挨拶し、棚田の間を縫うようにして上がると、黄金色の稲穂が頭を垂れ、ヒガンバナとのコントラストが眩しいが、汗を拭って振り返ると、大峰山系の山々も見え、伏見池のヒガンバナも、私の到着を待つように咲き誇っていた。

折角なので、明治三十五年（一九〇二年）に開設の、旧名柄郵便局舎の「**郵便長柄館**」に立ち寄ると、明治末から昭和初期にかけて

の旧逓信省発行の絵葉書や、赤い人力郵便車が展示され、庭園には「郵便配達夫の像」も立っていて、葛城の道から夕日を浴び帰途に着くと、ハゼて落ちた栗や色ずく柿など、小さい秋にも一杯出会えた一日だった。

令和二年十一月